

#### 4. 冪級数・TAYLOR 展開

4-1. 冪級数の収束性・収束半径. 冪級数  $\sum_{n=0}^{\infty} c_n x^n$  において、

- $x = x_0$  で各項有界 (即ち、 $\exists C > 0 : \forall n : |c_n x_0^n| < C$ )  $\implies |x| < |x_0|$  で絶対収束
- $r := \sup \left\{ |x| \mid \sum c_n x^n : \text{収束} \right\}$  : 収束半径  
( $\forall x$  で収束する時は便宜上  $r = \infty$  という。  $x = 0$  のみで収束する時は  $r = 0$ 。)  
  - ★ 収束半径  $r$  の時、 $|x| = r$  を収束円といい、 $|x| < r$  の範囲を収束円内という。
  - ★  $\sum_{n=0}^{\infty} c_n x^n$  の収束半径が  $r \iff |x| < r$  で絶対収束、 $|x| > r$  で発散  
( $r = \infty$  の時は  $\forall x$  で絶対収束)  
 $|x| = r$  の時は判らない (いろいろな場合がある)
- Cauchy の判定法 ( $n$  乗根テスト):  $\sqrt[n]{|c_n|} \rightarrow s (n \rightarrow \infty) \implies$  収束半径は  $s^{-1}$
- d'Alembert の判定法 (比テスト):  $\left| \frac{c_{n+1}}{c_n} \right| \rightarrow s (n \rightarrow \infty) \implies$  収束半径は  $s^{-1}$
- 上極限を用いた収束半径の公式:  
 $s := \limsup_{n \rightarrow \infty} \sqrt[k]{|c_k|} = \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \sqrt[n]{|c_n|}$  とすると、収束半径は  $s^{-1}$

4-2. Taylor 展開.

- 何回でも微分できる関数  $f(x)$  の ( $x = 0$  を中心とする) (形式的) Taylor 展開

$$\begin{aligned}
 (\spadesuit) \quad f(x) & \text{ “=” } \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \\
 & = f(0) + f'(0)x + \frac{f''(0)}{2}x^2 + \cdots + \frac{f^{(n)}(0)}{n!}x^n + \cdots
 \end{aligned}$$

- 剰余項:  $R_N(x) := f(x) - \left( \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \right)$
- 剰余項の評価 (Taylor の定理):  $f$  が  $N$  階微分可能の時、

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

- 証明に使う定理:
  - ★ Rolle の定理:
    - $f$ : 閉区間  $[a, b]$  で連続、开区間  $(a, b)$  で微分可能、 $f(a) = f(b)$
    - $\implies \exists c \in (a, b) : f'(c) = 0$
  - ★ Cauchy の平均値の定理:
    - $f, g$ : 共に 閉区間  $[a, b]$  で連続、开区間  $(a, b)$  で微分可能で
    - \*  $\nexists c \in (a, b) : f'(c) = g'(c) = 0$
    - \*  $(f(a), g(a)) \neq (f(b), g(b))$
    - $\implies \exists c \in (a, b) : [f(a) - f(b) : g(a) - g(b)] = [f'(c) : g'(c)]$  (比が等しい)
- $N \rightarrow \infty$  で  $R_N(x) \rightarrow 0$  の時、 $(\spadesuit)$  の右辺は収束して本当に  $= f(x)$
- 例えば  $\exists C > 0 : \forall N, 0 < \forall \theta < 1 : |f^{(N)}(\theta x)| < C^N$  ならばよい。
- $f$  が ( $x = 0$  の近くで)  $N$  回微分可能ならば、

$$f(x) = f(0) + f'(0)x + \frac{f''(0)}{2}x^2 + \cdots + \frac{f^{(N)}(0)}{N!}x^N + o(x^N) \quad (x \rightarrow 0)$$

- 形式的 Taylor 展開が元の関数に一致しない例:

$$f(x) = \begin{cases} e^{-\frac{1}{x}} & (x > 0) \\ 0 & (x \leq 0) \end{cases}$$

4-3. 項別微積分. 冪級数で表される関数  $f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$  ( $|x| < r$ ) について

- $\int_{t=0}^x f(t) dt = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{a_n}{n+1} x^{n+1}$  ( $|x| < r$ )
- $f'(x) = \sum_{n=1}^{\infty} n a_n x^{n-1}$  ( $|x| < r$ )

特に  $f(x)$  は収束円内  $|x| < r$  で何回でも微分可能。

4-4. 二項展開.  $\alpha \in \mathbf{R}$  に対し、

$$(1+x)^\alpha = \sum_{n=0}^{\infty} \binom{\alpha}{n} x^n$$

- $\binom{\alpha}{n} = \frac{\alpha(\alpha-1)\cdots(\alpha-n+1)}{1\cdot 2\cdots n}$  : 二項係数
- $\alpha = N \in \mathbf{N}$  の時は実質有限和で、普通の二項定理 :  $(1+x)^N = \sum_{n=0}^N \binom{N}{n} x^n$
- $\alpha \notin \mathbf{N}$  の時は本当に無限和で、収束半径 1

4-5. 練習問題.

(1) 次の関数の Taylor 展開を、例えば  $x^4$  の項まで (出来ればもっと) 求めよ。

- (a)  $e^{-x^2} = \exp(-x^2)$  ( $e^x$  の Taylor 展開に  $-x^2$  を代入せよ)
  - (b)  $(1+x)e^x$  ( $1+x$  と  $\cos x$  の展開とを掛け算せよ)
  - (c)  $e^x \cos x$  ( $e^x$  の展開と  $\cos x$  の展開とを掛け算せよ)
  - (d)  $\frac{1}{1-x-x^2}$  (筆算の割り算の要領で計算せよ。係数の列に見覚えは?)
  - (e)  $\frac{1}{\cos x}$  (分母が冪級数でも同様に割り算の計算が出来る)
  - (f)  $-\log(1-x)$  ( $\frac{1}{1-x}$  の展開の両辺を積分せよ)
- 以下は、いろいろな方法を試みよ。

- (g)  $e^{x-x^2} = \exp(x-x^2)$
- (h)  $\sin^2 x$
- (i)  $\frac{1}{(1-x)(1-2x)}$
- (j)  $\frac{1}{(1-x)^N}$  ( $N \in \mathbf{N}$ )

(2) 次の冪級数の収束半径を求めよ。

(a)  $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{2n} x^n$       (b)  $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^2} x^n$       (c)  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{3^n}{n!} x^n$       (d)  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{n^n}{n!} x^n$

(3)  $f(x) = e^x, \cos x, \sin x$  の形式的 Taylor 展開について、

- (a) 任意の実数  $x$  について収束すること (収束半径が  $\infty$ ) を示せ。
- (b) 剰余項  $R_N(f; x)$  の具体形を記せ。
- (c) 任意の実数  $x$  について、 $R_N(f; x) \rightarrow 0$  ( $N \rightarrow \infty$ )、従って、形式的 Taylor 展開が収束して元の関数に一致することを示せ。

(4)  $f(x) = e^x$  の Taylor 展開の剰余項  $R_N(f; x)$  について、

- (a)  $|R_N(f; 1)| < 10^{-6}$  となる (出来ればなるべく小さい)  $N$  を与えよ。 ( $2 < e < 3$  であることくらいは用いてよい。)
- (b)  $e$  の近似値を小数第 5 位まで求めよ。
- (c) 誤差が  $10^{-5}$  以下であることを保証せよ。但し、各項の四捨五入による誤差 (丸め誤差)・剰余項を無視したことによる誤差 (打切誤差) の双方を考慮に入れよ。